

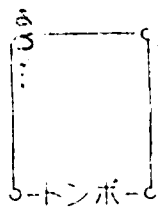
才二回 史蹟めぐり

一 野島地蔵尊

一とぎ三月二十七日(日)午前十時越谷駅集合
十時二十分大宮行バスにて

一 会費 三百円(昼食、バス代)

主催 越谷市郷土研究会



郵便はがき

野島山 浄山寺略縁起 地藏尊

野島山に安置してある本尊の地藏大菩薩は 人皇第五十六代
清和天皇の貞観三年、今より一千百余年前、天台の高僧慈覚大
師、一刀三礼の御作で、大師がかつて日光山に登つて中禅寺を
開こうとした。たまたま降雨烈しく途中の河水は水があふれて
船を渡すことが出来なかつた。そこで河岸に二昼夜滞在して水
の引けるを待つていた。丁度季節が李の実の熟する時だつたの
で、大師はこの李の実を取つて食べた。そして食べた李のうち
の一つの種子を持つて日光山に上つたのである。

大師はこの種子を大空に向つて

「この種子の落ちた所を靈地と定め給え」と投げて一字造営の
願をかけた。

それから八年、諸国を廻つて辿りついたので武州埼玉郡太田
庄岩付であつた。

時あだかも李の花がらんまんと咲きそろつていたので大師は
これを見て、

「これは私が八年前に、大空に向つて投げた李の種であろう」と
思つて、そこに一字の堂を創設されたのが、即ち今の慈恩
寺である。大師はその李の樹を自ら伐採して三尊の仏体を彫刻
した。それは根本で観音、中木で地藏尊、うら木で薬師の三体
をつくり、観音は慈恩寺に、地藏尊は慈福寺（今の浄山寺）に
薬師は慈林寺に安置した。依つて持大師の名の頭字を寺号の冠
字として共に大師の開基としている。

このように三ヶ寺とも天台宗に属し、野島山も永く慈福寺と
言つていたが、天正十九年徳川家康公が越ヶ谷に御放鷹の際、

当山地蔵尊の靈驗あらたかなのを聞かれて、親しく参拜された
ことは、新編武蔵野風土記稿に記されている。即ち

「浄山寺は神宗曹洞派、足立郡里村法性寺末野島山と号す。当
寺は貞観二年慈覚大師の建立にして本尊祇命地藏尊は大師一刀
三礼の作なり。元天台宗に属し慈福寺と号したり。

東照神君越ヶ谷辺御放鷹の時、本尊靈驗を聞き召されて御参
拜あり。

「此の地靈にして山僻密として浄し」と上意ありて寺領三百石
の御朱印を賜り曹洞宗に改め野島山浄山寺と命ぜられる。今本
を片目地藏と唱う。信仰するもの多し。寺宝として鋤杖あり。

古色のものにして、その由来審ならず。鐘樓は延享三年鑄造
の鐘を懸く。附屬社久伊豆神社、千体地藏堂なり云々」

時の住僧は明山和尚といつて曹洞派の僧で臨時補住であつた
が、家康のために武運長久玉体安穩の大祈願修したので、家康
は喜びの余り、報恩謝徳の印として御朱印三百石を賜つたので
ある。所が明山和尚は

「こは過分なり」として堅く辞して受けなかつた。

家康は更に方法をかえて、袖の中から鼻紙を取出して、献香
料として高三石を賜り由を自ら書いて差し出した。

これを世に鼻紙御朱印といつて多くの人の知る所である。

当時一万三千八百坪の境内には、老松古杉鬱鬱として天日を
さえぎり、門前の池水は、あくまで浄く 望絶佳眺真に清浄無
垢の靈地である所から、慈福寺を浄山寺と改称し、又天台宗を
曹洞宗に改宗して、其の後相伝えて現住二十五世石井敬徳の代
に至るまで連絡相統しているのである。

本尊地藏大菩薩は早く、から人に知られているように、子授け

子育、安産、出乳汁等で一千数十年の間無限の大慈大悲の大誓願を垂れさせられ、感応の妙理、加持の幽義は広く有縁の衆生に会得せしめ、これによつて靈驗感応を蒙る者は昔も今も異なることはない。

桜町天皇の元文六年の頃であつた。地蔵大菩薩は普通の僧侶の姿となつて、毎日朝早く諸の定に入るの御誓願で、錫杖を打ち振り乍ら衆々の前に立つて、長夜の眠りを覚まさせ布施愛語をもつて民衆を教化されたのである。

或る時逆縁にふれて茶園で慈眼を傷つけた血が涙にまじつて流れ出たので、門前の池の水で眼を洗つた。

それからというものは、この池に棲んでいた魚も虫も、みな片目になつたという。その後誰言うとなく、この地蔵菩薩を片目地蔵と名づけ、今でもその仮名を呼んでいる。

又野島の地に茶の木を栽培しないのも、その靈現ありたるによるのである。

それ故、一切衆生の眼病をなおしたり、殊に産婦の難産に苦しむ人は一心に「南無野島地蔵大菩薩」と唱えれば声に応じて來迎し、その身を加持して頂けると思えば突に夢のさめるように速に安産する。生れた赤ん坊が神符を掌に握り又は頭上に載せて生れるのも現在多くの人が見たり聞いたりしている所である。今から二百三十年前後光明天皇の承応二年住僧四代目の州黨和尚の頃であつた。地蔵尊靈体の背中に釘を打ち鉄の鎖でつないだので遊化をされなくなつた。けれども現報のがれ難く住僧業病にかゝつて遷化されたということである。

其の後中御門天皇の享保十一年十二月九日十代目の住僧日庵和尚はお開帳の折、背中の釘や鎖を見るに忍びず技きとられた

よつてこの事を記して曰く

「享保十一年丙午年十二月九日、当時地蔵尊靈驗不可思議にして俄かに遠近の男女參詣者夥しく、それは如何なるわけかといふに、地蔵尊靈體骨に鉄鎖あり、日庵叟、田口元右衛門、酒屋佐五兵衛等信心肝に銘じ、かの鉄鎖を抜きて濟度ならしむ。それ以來遠近いよいよ尊崇して踏蹟成就するものなり……」と大縁起に明瞭である。

現在この釘と鉄鎖は宝物として保存してある。感心の応ずる所いよいよ靈驗あらたかにして、一念信受の人々は必ずそのしるしを得ないものはない。

安永七年、東京湯島天神神樂殿にて開帳を備したところ、敵方の參詣人は朝の如く群集し、袖を連ねて堂前につゞいた。

依つて天明五年同所を出張所と定め専ら布教弘法利生の行を行つたところ、正に十五万人に上つたという。

現在、寺に存する奉納品は皆その時に納められたものである。其の後明治維新の改革に遭遇して、神仏の混淆を許さず、明治六年本坊に帰還して現在に至つてゐる。

けれども僧徒の參詣するもの甚だ多く、靈驗のあらたかなること今も昔と変りなく、一念信受の輩は必ず感応を蒙る。これ皆地蔵大菩薩の靈徳のしからしむる所であつて崇ぶべく仰ぐべきである。

頭逆の人をば救う願なれば

野島の寺に来てぞたのめよ

日もかくれ月もまだ出ぬ暗の夜に

たのむ仏は地蔵よりなし